OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ゲイ」を生きる : 生存という闘争
Author(s)	大北, 全俊
Citation	臨床哲学. 2000, 2, p. 20-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ゲイ」を生きる

――生存という闘争――

大北全俊

はじめに　ある生存の肯定

「彼」はゲイである。ここでは、その彼について語ろうと思う。

はじめは、「同性愛とは何か」について語ろうと思い、その性的欲望について、また「同性愛嫌悪（ホモフォビア）」について語ろうと思っていた。そして「同性愛者」を差別する社会の構造を問題にしようと思っていた。しかし、彼とのやりとりを通して問いを変えようと思った。

彼は大学の講師であり大学の用意する社宅に住んでいる。社宅は仕事場というパブリックな場と、住まいというプライヴェートな場が微妙に交差する空間である。同性愛が嫌悪され奇異な目で見られる現在の日本で、彼は周囲の住人に自分がゲイであることを知られないように気を使う。既に、30を越えて独身だということを第１の理由に、彼はゲイではないかという噂を隣に住むひとに仕事場で流されている。

そこで彼に少し意地悪な質問をした。なぜ、自分のセクシュアリティを隠して暮らさなければいけないのか。この社宅で住人の目を気にすることなく、男の恋人を連れ込んだり、一緒に暮らせる社会が望ましいだろう。その社会を実現するために、カミング・アウトして闘う気はないのか、と。

彼が言うには、まずセクシュアリティを隠すつもりはないけど、わざわざ知らせることではない。それでも世間では噂にもなっているようにわざわざそのことを取り沙汰される。仕事場（大学）に自分のセクシュアリティが知られることによってクビにはならないとは思うけど大丈夫だと言い切る自信はない(1)。そんな嫌悪や好奇のまなざしに対処する手間の予想のしがたさを述べたあと彼は次のように語った。

「今のままの社会でも、君のいう理想郷でも、僕にとっては同じだよ。別にここから引っ越しすれば恋人と暮らせるのだし、もしそれが難しくてもまたそれなりの方法を考えればいい。僕にとって大事なのは、わけの分からない嫌がらせをする大学と闘う

ことより、恋人との関係や趣味を存分に楽しむことなんだ。」

確認しておきたいのだが、ここでゲイ・リブなどに代表される、同性愛嫌悪の浸透している社会を告発し同性愛差別の撤廃を目指す運動を否定しようとするのではない。ただ、彼の生存と発言は「いかに現在の日本が同性愛者にとって生きにくいか」ということに終始することなく「いかに生きるか」というごく倫理的な問いに貫かれているような気がした。その問いについて考えるためにはどうすればいいのか。他ならない彼自身の生存に寄り添うにはどうすればいいのか。「同性愛」というカテゴリー自体が社会的で歴史的な偶然の産物であるにしても、あるいはそのセクシュアリティが脳の構造などによって生理学的に決定されているにしても、一個の彼がいまある現実を前にして「いかに生きるか」ということに直面したとき、それらの言説は彼自身に寄り添うことができるのだろうか。また、彼の発言の背後に回って、実はこの社会の抑圧におびえているのに彼は強がりをいっているのではないか、と解釈を加えたり、彼の姿勢は忌むべき同性愛嫌悪が浸透している現実からの逃避ではないのか、と批判することが彼にとって力になるだろうか。「どの社会に生きていても同じ」と言い切る彼のその背後にさかのぼるのではなく、そう言い切る彼そのものに寄り添うこと、その生存を肯定すること、そこから見えてくることを記述すること、そういった試みが彼にとって力となり、強いてはゲイについてあるいはセクシュアリティについて「哲学する」ことの意義なのではないかと思うようになった。

だからここでなされることは「問い」とそれに対する「答え」ではない。それは「彼」の生存を肯定するという、「彼」を「ゲイ」として表現しうることを肯定するという「試み」なのだ。臨床哲学のグループでこの１年ほど「セクシュアリティ」について考えてきた。そこで生まれた言葉は「セクシュアリティに対して中立的な態度はありえない」ということだった。自分のセクシュアリティについて、あるいはより一般的にゲイやレズビアンについて、その語りを聴くということあるいは聴かないということ、それだけでそのセクシュアリティに対する肯定・否定をわけてしまう。「中立的」というメタな立場をとり、あるセクシュアリティを対象化すること自体がそのセクシュアリティに対する抑圧になりうる。そのいい例が「なぜ」というなにげない問いにみられる。「なぜ」と問われ、説明しなければならないという責任を負わせること自体が、暗黙のうちに「なぜ」と問われないマジョリティを仮定しその視点からマイノリティを語るという構造を生み出す。ゲイなどの性的なマイノリティに対して「なぜ」という問いかけ自体が抑圧そのものなのだ。「なぜ異性を愛するのか」「なぜ同性を愛するのか」、この二つの問いは修辞的には対称をなしているとしても、現実に発せられるな

らば同じ状況を生み出すだろうか。

もしセクシュアリティについて「哲学する」ならば、ここで「なぜ」「何」という問いは危険だ。それはそのセクシュアリティを、理由づけを必要とするもの、言葉で管理しうるものとして扱い、そのセクシュアリティに対する社会的な抑圧を、まさに社会的に再生産しかねない。それならば、あるセクシュアリティを生きている生存を肯定すればいいのではないだろうか。ゲイを、ゲイというセクシュアリティを生きている「彼」を一切の批判を加えることなく肯定すればいいのではないだろうか。そうすればここで語らずとも、ゲイを、そして彼を取り巻く社会を自ずと明らかにすることもできるだろう。この語りを聴くひとたちの心の内に去来する肯定と否定という実践を通して。

しかし、ゲイについて語ること、彼について語ることは、それを肯定して語ることはそもそも可能なのだろうか。あるいはこうも言い換えることができるだろう。ゲイを、ゲイである彼を語りうるのは誰であるのか、それはゲイが、彼自身が自らを語るしかないのだろうか、と。

第１章　ゲイを「語る」ということ

第１節　要求される「当事者性」

ゲイについて語ることは難しい。それは「はじめに」でも述べたようにゲイをはじめセクシュアリティに対して中立的な態度はありえないという事実による。すべての語りがゲイに対する否定か肯定に大なり小なり傾く。しかも同じ言葉が語られるとしても、語り手や受け手、そしてその語りがなされる状況によって、同じ言葉が全く正反対の効果を生み出すことがあり得る。実際のところゲイを肯定して語ることはさらに難しい。その理由は単純にいうとゲイに対して肯定的な「言葉」、ゲイの生存に寄り添った「言葉」がないからである。「やっぱり家族が一番」というなにげないキャッチフレーズでさえ、家族とは結婚制度をもとに形成する夫婦を中心にその子供がいる風景であり、それはゲイ自身が積極的に選び取る生存の形態ではない。また、家族の中心をなす「親」が子供のゲイというセクシュアリティをすんなり受け入れるという事例は極めてまれだろう。そこに「やっぱり家族が一番」とこられると、そのままではゲイの生存を疎外する言説になりかねない。しかし、ゲイがゲイ同士で同じ言葉を発するとしたら、たとえばゲイがゲイの恋人と選び取った関係を「家族」と呼ぶなら必ずしもゲイの生存を疎外する言説ではない。

この「言葉」の問題を、言葉を語る「語り手」を問題とすることによって明らかにしようとするのが現在のゲイ・リブの立場と解釈していいだろう。その一例として、『ゲイ・スタディーズ』の「まえがき」から、

> わたしたちはゲイ・スタディーズを、同性愛を差別する社会との闘いの中から生み出されてきたものとして考え、このように定義している。――当事者たるゲイによって担われ、ゲイが自己について考え、よりよく生きることに寄与すること、さらに異性の間の愛情にのみ価値を置き、それを至上のものとして同性愛者を差別する社会の意識と構造とを分析することによって、同性愛恐怖・嫌悪と闘っていくのに役立つ学問。
>
> (『ゲイ・スタディーズ』2-3)

『ゲイ・スタディーズ』が「当事者性」を要求する理由は極めて明確である。文学、医学、心理学などの諸領域を通して、わざわざ「自らは同性愛者ではない」と断るものによって「同性愛」あるいは「同性愛者」は一方的に「語られて」きた。「同性愛・同性愛者」は、あくまで語る「主体」ではなく、語られる「客体」であった。同性愛嫌悪の浸透した近代にあって、それらの言説が客観を装いつつどれほど現実社会の通念による歪みを経ているのかということ、たとえ書かれている内容が「中立的」であろうと「語る主体＝異性愛者」「語られる客体＝同性愛者」という非対称の図式そのものに対する不信感は拭えない。奪われてきた言葉を取り戻すべく、「同性愛者」が主体的に自らを語ること、自ら生存し語る主体になろうとすること、それこそが無責任に広まっている同性愛嫌悪の言説に対抗し、脅かされる生存を肯定する作業だということである。彼らの「当事者性」の要求には充分な理由がある。

ただ、このゲイ・リブの主張を尊重して、ここでの語り手が自らのセクシュアリティについて何らかのカミング・アウトをする必要があるのか。もしゲイでないのならゲイについて語る資格はないのだろうか。あるいは、ゲイについて肯定的に語りうるのはゲイ自身をおいて、ゲイである「彼」について語るのは彼自身をおいて他にいないということだろうか。しかし、「彼」はパブリックな場でカミング・アウトすることを拒否している。もしゲイ・リブの立場を貫くならば、この生存を肯定することはその声を聴くことは彼がカミング・アウトを拒否している以上いつまでもなされないまま聴くことができないままになりはしないだろうか。決してゲイ・リブと「彼」との間に対立があるわけではない。ゲイ・リブの活動をするものと、ゲイではあってもゲイ・リブの活動をしないものと両者が生存し、共存しているだけだ。しかし、両者の間に

あって「彼」を語ろうとするものにとっては、どちらかの立場を選択しなければならない。そして答えなければならない。ゲイか否かカミング・アウトしないならばその語り手がいかにしてゲイについて語りうるのかを、そして仮にゲイとしてカミングアウトするにしても、しないにしても、なぜ「彼」について語りうるかを。

第２節　政治と生存に寄り添う知

まず、語り手が当事者である必要があるか否か、つまりゲイである必要があるか否か、について。

しかし、実はゲイ・リブの要求する「当事者性」は「ゲイであるか否か」というような各人の内面的な属性の話ではないのである。現在広まっているゲイというカテゴリーを自ら引き受けるか否かという政治的な態度表明の問題であり、いわば「表現」の問題なのだ。『ゲイ・スタディーズ』が自らの知の性格を定義して以下のように記述している。

> この定義については、同性愛者がよりよく生きることに寄与したり、同性愛恐怖・嫌悪と闘っていくのに役立ったりするというような予見に満ちた（あらかじめ功利的な方向性を持った）学問は、純粋な知の探求ではないという批判が容易に想定されもする。しかし、そのような批判は、まさに本書が行う分析と批判の対象でもあった。
>
> ゲイ・スタディーズは、その成り立ちとそもそもの知の方向性からいって、それ以外の形を取り得ない。それはあらかじめの功利性ではなく、自らがそこに向かう（そこにしか向かいようのない）結果としての寄与なのだ。むしろそのような批判には、「純粋な知」という中立の神話に、いかにホモフォビアが巣くっているのかを明らかにすることで応えたつもりである。
>
> この定義の次元ではまた「よりよく生きる」とか「闘う」という主観的な言葉も含まれる。（中略）
>
> （中略）そのことを通して、異性愛中心的な社会そのものに構造的に組み込まれているホモフォビアについて明らかにし、そのような社会を変えていく可能性を見いだすものである。
>
> 同性愛者の現実から出発し、差別の構造を白日のもとに晒すこと。それによってホモフォビアに抵抗していくことを可能ならしめること。これこそがゲイ・スタディーズを実践している私たちがいま切実に望んでいることだ。
>
> （『ゲイ・スタディーズ』3-4）

「セクシュアリティに対して中立的な立場はありえない」としたわれわれの立場と、『ゲイ・スタディーズ』の立場は似たものがある。セクシュアリティについて、この場合ゲイについて何か語る以上それが肯定的か否定的かどちらかの傾きを持たざるをえない。大なり小なり政治的な語りにならざるをえない。その政治性を積極的に引き受けるというのがゲイ・リブであり『ゲイ・スタディーズ』の姿勢である。それゆえカミング・アウトを求める。しかしゲイについて語ることは必ずしも、このような政治性に回収されるのだろうか。

ゲイ・リブの「同性愛嫌悪（ホモフォビア）に抵抗していく」という作業は、しかしながら、具体的にはどのようなものを指すのだろう。同性愛を差別する表現に対しての抗議はもちろんであるが、事態はそれほど単純ではない。同性愛嫌悪でまず問題となるのは、「同性愛者自身の同性愛嫌悪」なのである。つまり、自分自身のセクシュアリティを受け入れることができないということだ。そのあたりの事情を『「レズビアン」である、ということ』の著者である掛札悠子(2)が、自らのセクシュアリティを受け入れるのが困難であった事情を語っている。同性愛嫌悪の浸透した「語られている」言葉に、そして笑われる生存に自らをアイデンティファイできないのだ。

> 私はずっと、「レズビアンとはどんな女性のことを言うのか」を知りたいと思い、それに照らしあわせて、自分がレズビアンであるかどうかをはっきりさせたいと思っていた。そうしなくては不安でしかたなかったからだ。だから、心理学の本を読んでは「自分は異常なのか」と悩み、ポルノまがいの表現にであっては「私はこんなものと一緒にされたくない」と思った。私の外側で、私の不安など知るはずもない人たちが書いたり、言ったりしていることにふりまわされていたのだ。
>
> （掛札 223）

同性愛嫌悪は空間的なクローゼットの内／外として、あるいは具体的な人物の集合として存在しているのではない。それは同性愛のセクシュアリティを過度に誇張して表現したり、またそこに正常／異常・自然／反自然という二項対立を当てはめて同性愛を異常・反自然と形容したり、とりわけそれをネタに雑談やメディアの場で笑う、そういったもろもろの振る舞いのうちに存在する。より巧妙には、先に指摘したように、同性愛であるというその理由を問いただされるというその振る舞いのうちにも存在する。ゲイももちろんこの社会的な振る舞いから自由なわけではない。自分のセクシュアリティに気づく前から子供の頃から、人のまねをするようにその同性愛嫌悪の振る

舞いを身につけ身体に刻みつけられている。そして、自らのセクシュアリティがどうもその笑われるものであることに気づいたときから、その人の不安は始まる。こともなげに自分のセクシュアリティを受け入れる人もたくさんいるようだが、自分自身のうちに刻み込まれたその振る舞いから、そして家族を含め自分の周りで絶えず再演されるその振る舞いから距離をとるのはそれほど容易なことではない。自らのセクシュアリティを受け入れることができず同性愛嫌悪に振り回される姿は、シャドウボクシングに似ている。他人に対しては「自分が同性愛者だと知られたらどのような目に遭うのだろう」と危惧し続け、自分に対しては「なぜ自分は同性愛者なのか」と問い続ける姿は、具体的な相手のない、つかみ所がないゆえに終わることのないシャドウボクシングだ。この同性愛嫌悪から解放されるとはこのシャドウボクシングからおりることである。

ここで傲慢な議論の転換を行いたい。それはごく通俗的なプラグマティズムのそれだ。つまり、ゲイが語る言葉がゲイを肯定する言葉であるというのではなく、あるゲイが自らの同性愛嫌悪を相対化し、自らのゲイとしてのセクシュアリティを肯定する言葉、それを可能にする言葉がゲイの生存に寄り添いその生存を肯定する言葉であると。これはトートロジーだ。しかし、具体的に差し出された言葉なしに、どのような言葉がゲイの生存を肯定しそれを可能にするのかと議論しても、いまそれに応える手だてが見あたらない。セクシュアリティについて語り、ゲイについて語る安全な方法などあるのだろうか。それは自らゲイであるとカミング・アウトすることでえられるのだろうか。

掛札は自らのセクシュアリティを受け入れる過程を次のように続ける。

> しかし、「私はレズビアンである」と表明することを通じて、こうした私の考えが変わり始める。「私はレズビアンである」と言うことで、「私自身が、生きている『レズビアン』のひとつの現実なのだ」という意識が生まれ、自分自身が十年来、目をそらしつつ抱えてきた現実に直面することができるようになってきたのである。本にも、人が話している言葉にも、実在する「レズビアン」の姿はない。だが、私自身はたしかに生きているではないか、その現実で十分ではないか、と。（掛札 223）

掛札はこうも語っている。

> 私は、ある特定の女性（たち）に対するなんらかの欲望が自分の中にあるということだ

けしか知らない。そして、少なくともその欲望の存在だけはだれにも否定されたくないし、それを理由に私に向けられる圧力や抑圧に甘んじる気もない。私が「自分はレズビアンだ」と表明するようになったのは、ただその一点のみのためである。

私は、自分が女性を好きになる理由を知らないし、それが過去の何かをきっかけに後天的に引き起こされたものなのかどうかということも知らない。異性愛者が、異性を好きになる理由を知らず、それが後天的なものであるとすれば、何をきっかけにそうなったのかを知らないのと同じように。（掛札 190）

彼女にとって自らのセクシュアリティを受け入れるようになった言葉は、その本の表題ではなかったかと思う。「レズビアンである」という全くの肯定の言葉、それを一人称で口に出すこと、演じること、そうしてその周りに現実に自分が行っている振る舞いや思いを並べていったのではないだろうか。「レズビアンである」という言葉、おそらくは呪文のように心の中で唱えた言葉、そこには最初誰もいなかった。それは当事者のない言葉であった。そこに掛札が自ら「レズビアンである」と口にしたとき、当事者が生まれた。そうすることで掛札はシャドウボクシングから降りた。

「ゲイを肯定する」とは、シャドウボクシングからおりておのおののセクシュアリティを現実のものとして受け入れることであり、それは自らのセクシュアリティについて悶々と考え込むのではなく、具体的にだれといつ何をするかということに専念することである。そのことはこうも言いうるかもしれない。同性愛についてみんなで笑いあうことによって、「もし同性愛なら笑われるのだぞ」とお互いがお互いを「管理」する振る舞いから距離をとること、その「管理」の目的やその是非はともかく、もし自らのセクシュアリティがその「管理」にそぐわないのであれば、自らのセクシュアリティを問うのではなくその「管理」を問うこと。ゲイ・リブや掛札が主張している「自らのセクシュアリティを受け入れる」とは、社会の構造や欲望としてのセクシュアリティを明らかにすることではなく、具体的な場面である特定の人に出会ったときに、どのように振る舞うのかということに専念することを意味しているのではないだろうか。

「彼」はカミング・アウトについて次のようにいう。

「それは、時が来たなというときにする」

まず彼の妹に対しては、彼が一時居住していたオーストラリアに遊びに来るというときだった。恋人と部屋をシェアしていた彼は、遊びに来るのはかまわないけど、来る以上は知っておいてもらわないと不都合なことがあるとして、そのときカミング・

アウトした。現在の職場の同僚にも微妙な言い方をしているらしい。

「ゲイの方だけカミング・アウトさせられるというのは変じゃない？」

あくまで「自分の方だけカミング・アウトすることは癪にさわる」といいながら、職場で流されている噂を教えてくれたひとに、「そういう噂が好きな人っているんだよね」といいながら、カミング・アウトしないまま具体的なゲイについて語ったそうだ。自分の周りにゲイの知り合いはたくさんいるということ、よくゲイに対して「私はその趣味はない」という言い方がされるけど彼らは決して趣味でゲイなのではないということ、自分で選んでゲイなのではないということ、だからそのことを差別したり笑ったりすることは彼らの生存を否定する振る舞いだということ、そのことを自分も理解したいと。でも、だからといってゲイが不幸なのでも哀れなのでもないということも。現在、彼とその同僚の先生とは一緒に飲みに行くぐらい関係は良好だし、噂を流した隣の人とも、その人が家を空けるあいだ飼い猫を預かるほど仲は悪くない。カミング・アウトをめぐって必要なのは、馬鹿正直さではなく戦術ではないだろうか。カミング・アウトするかしないかの二者択一ではなく、どのように自らを表現するかというスタイルについての意識ではないだろうか。

『ゲイ・スタディーズ』も掛札も同性愛者が自らについて「同性愛者」として「語らされる」ことの抑圧について指摘している。ただ両者とも、押しつけられ、それに基づいて語らされるところの「同性愛者」というレッテルを逆手にとって、そのレッテルの内実を自ら埋めていこうとする。「語られるもの」とされてきた「同性愛者」を「語る主体」とすることで、同性愛をめぐる言葉を取り戻そうとする。しかし、同性愛、この場合はゲイを肯定する作業を「同性愛者」を名乗る者にのみ許すとしてしまうのなら、語るものに対して「名乗るべき」と主張することは実はいままでの「語らされる」という罠を反復することになりはしないだろうか。ここにあげたどの例を見ても、具体的な振る舞いを抜きにして、その人自身の表現抜きにしてその人を「アイデンティファイ」することに抵抗している。「同性愛者である」「ゲイである」という表現は、まさしくその場その場の状況に基づいてこそ意味を持たなければならない言葉だろう。ここで語り手がどうしても「ゲイである」とカミング・アウトさせられるとするなら、ここでは「彼」について語るのであって語り手自身のことについて語るのではないから、そのとき、語り手について何ら具体的な記述なしに「ゲイ」という言葉が流通することになる。それは、ここでの「彼」という具体的な生存を肯定することでゲイについて語ろうとする試みに反する。だから、語り手は「ゲイである」とも「ゲイではない」ともいわないことにする。その居心地の悪さを引き受けようと思う。

そして、なぜゲイについて語りうるか、誰がゲイについて語りうるのか、「彼」について彼以外が語りうるのか、それに対する答えはない。というよりも、それはこの試みから見て誤った問いの立て方であった。セクシュアリティにおいて、ゲイというセクシュアリティを通して彼の生存を肯定する作業において、見るべきものは彼の他者へ対する「表現」ではないだろうか。ここで語りたいのは、彼の生存であり、それは具体的には彼が身体でもって声でもって表現することであり、それは彼が他者に対して他者にまみえながら表現することである。読みとるべきは、彼の「内面」ではなく、彼によるその表現とそれが埋め込まれているところの文脈ではないだろうか。その「内面」も、その表現を肯定してこそ、あるいは否定してこそ語りうるものであり、彼自身も、他者に対する表現なくして自らの内面を言葉にはできないだろう。身体によって、あるいは言葉によって表現されることなく、あるいはその表現を想像することなく、セクシュアリティを取り出すことなどできるのだろうか(3)。ただ少なくともここでは、彼を「把握」することを目論んでいるのではなく、「肯定」することを試みているのだ。彼の内面にさかのぼり彼の振る舞いの原因をつかむのではなく、彼の生存、その振る舞いを語るのである。また、先に掛札が自らのセクシュアリティを受け入れるその過程について、はじめから当事者が存在しているのではなく、当事者が生まれたと語った。ゲイについて何か具体的に語る前にその語りの当事者があらかじめ存在しているのではない。語ることで当事者は生まれる。それは自分のことを語るときでさえそうではないだろうか。ゲイについて語るときの当事者はゲイなのではなく、ただ「その語り」の当事者としかいいようがない。受け入れるべきは語ることで語り手も当事者にならざるをえないということ、その語りがもしホモフォビックなものなら語り手もそのホモフォビアの当事者であるということではないだろうか。彼のことを「ゲイである」と語ることで語り手がその語りの当事者になることは不可避である。だから、問われるべきはむしろ、「なぜ語りうるか」ではなく「なぜ語るのか」である。それは、『ゲイ・スタディーズ』が、そして掛札が、たびたび強調することに他ならない。では、なぜ語るのか、それに対してはできれば次の章全体で応えたい。

第２章　「逢う」ということ

しかし、彼のことを「ゲイである」とアイデンティファイすることはなにほどか意味のあることなのだろうか。また、何をもって彼のことを「ゲイである」と言うことができるのだろうか。

「僕にとってゲイであるということは、僕のほんの一部分のことなの。」

彼は山に登って花の写真を撮ることに没頭するし、料理も好きでよくする。講師としての仕事も周囲から信頼を得ているし、同僚と一緒にテキストもつくっている。そのテキストのイラストも描く。最近は仏像を観ることにこっている。

「だから、わざわざ、人に対して僕はゲイですって、男とベッドをともにしますってことだけ取り出して人に言うのってなんかおかしい気がする。」

彼のことを山登りの好きな人として、料理好きの人として、仏像好きの人として、北海道出身の人として語るのではなくて、なぜ「ゲイである」と語ろうとするのか。結局ここでの語りも、彼のことを肯定するとしながら、興味本位で人のセクシュアリティを取り上げては騒ぎ立てるホモフォビックな言説のひとつにすぎないのかもしれない。

ただ、それでも彼はゲイであるということを無意味なことだと言っているのではない。やはりそのことは肯定しているのだ。自分がゲイでよかったと思うことはときいたら、自分は他の人たちと違っていたいという性格だから、ゲイであるというのはそれだけでわりとドラマチックな人生を送れるからその点ではゲイであることを楽しんでいるかな、といった後で、

「その人その人に逢ってきたということかな。」

と言った。

彼のセクシュアリティを「ゲイ」として語るということは、同性である男とセックスしてきたということだし、いまでもそのセックスを欲望しているということだ。しかし、彼にとって「ゲイ」であることはセックスだけを意味しているのではない。

「セックスは悪いことでもなんでもないから。」

彼はセックスだけを取り上げるのはつまらないという。どうやらそれはひとつの「賭け金」のようだ。人の数だけ、行為の数だけ様々なセックスがある。そのとき一人と、あるいはより多くの人と身体を接触させるとき、それぞれの快楽を生きる。別にそれだけで終わってもいい。もっといえば、「セックスしうる」という認識の交換だけがあって現実にセックスしなくてもいい。でもそのときの感情や記憶は少し面白い投資に使えるはずだ。それは日常生活のサイクルでは出会うきっかけのない男同士を結びつけるのに使える。ゲイの男同士の出会いは学校や仕事場、近所や親戚といった場では成立しにくい。それは、ゲイバーであったりハッテン場であったりゲイ雑誌の投稿欄であったりする。出会いの場が限られているということにゲイに対する抑圧を見ることもできるが、しかし、そのことはおよそ現在の家族制度では想像しにくい男同

士の接触を可能にもする。彼に限っていえば、彼は北海道から大阪に移ってきて、まず友達・恋人募集の投稿をある雑誌に出す。同時に、ゲイの山登りのサークルが出していた投稿に手紙を出す。彼は自分が出した投稿をきっかけに、３人ほどと出会うが、それぞれ職業も生い立ちも年齢も趣味も違う。山登りのサークルでは６０代の人から２０代までそれぞれの年代がそろい、結婚して子供や孫のいる人もいれば学生もいる。職業におよそ接点はなく、出身も違う。そのメンバー同士で身体を接触させるということはまずないけれど、ゲイというセクシュアリティを賭け金にした関係はその顔ぶれの脈絡のなさゆえに一括りには語れない。

ひょっとすると、この「語れなさ」こそが積極的な意味を持っているのかもしれない。実は、彼のことを「ゲイである」と語ることは、「ゲイである」ことによる出会いが「一括りには語れない」ということを語ることなのかもしれない。

「その人その人に逢ってきたということかな。」

彼がゲイ雑誌などのコミュニティを通して出会ってきた人たちを語ろうとするならば、その人たちを一括りに友達とか恋人という仕方で語るしかない。でもそのように語ってしまうと、彼のことを「ゲイである」とアイデンティファイすることの意味をなくし、誰についても当てはまるものになってしまう。また、「ゲイ」というカテゴリーやコミュニティの特殊性を際だたせようとしても、「ゲイ」というカテゴリーは歴史的な産物であろうし、そのコミュニティも現在の社会のある布置にすぎないとも言える。つまり、彼が「ゲイである」ということは、彼に近づいていっても彼から遠ざかっても見えにくくなっていくのだ。しかし、彼が「その人」に逢うことができたのは、「その人」はゲイとは限らないけれども、彼が「ゲイである」からに他ならない。彼にとって彼が「ゲイである」ということ、それは「その人」に逢えたということそれ以上でもそれ以下でもないが、それゆえに代え難い。

彼のことを「ゲイ」としてアイデンティファイすることの意味は、彼が「ゲイ」であるがゆえに「その人」と逢ってきたということ、「その人」と逢えたということ、そして、その出会いを単純な友達という言葉や、趣味の合う人という括り方に回収されないためだ。「ゲイである」ことは歴史的で社会的な部分集合にすぎないが、「ゲイである」がゆえに逢うことのできた「その人」とその人との「逢うこと」は他に置き換えることができない。彼の生存を肯定するということ、彼の生存を「ゲイ」という言葉で表現しそれを肯定すること、そして語ること、それは、「その人」と逢えたということの代え難さを肯定することなのだ。「その人」と逢えたということを他の言葉に還元することに抵抗することなのだ。あるいは、そっとしておくこと。

彼はゲイである。社宅に恋人が上がり込む。周囲の住人に知られないように恋人が大きな声を出すと注意する。そのことでたまにもめる。恋人が我慢できないというならここから引っ越しすればいいと彼はいう。もし彼が立ち上がって、人に隠れて逢うということに抑圧を感じ、公にカミング・アウトすることもまたひとつの生存だろう。しかし、彼は闘わない。職場の同僚になぜ結婚しないのと尋ねられても適当にやり過ごし、その場をそれなりに楽しむ。帰れば恋人が待っている。週末には山登りの仲間と出かける。社宅で暮らす分住居費が浮くから、そのお金を自分の楽しみに投資する。彼は札幌にまた戻ってしまう。恋人とは離ればなれになり、現在ゲイのカップルを法的に保護する制度がない以上、二人のあいだになんの保証もない。相手が病気になっても看病できる保証もない。彼らはその距離を埋めるだけの制度上の関係をつくらないのだ。それでも、その距離自体を楽しもうとしている。

「寂しいとは思うよ。でも、寂しいということは悪いことじゃないよ。」

彼を取り巻く社会に同性愛に対する抑圧を見いだし、そのことを告発することも可能だった。しかし、彼の生存に寄り添いながら、社会に対する告発に終始してしまうとしたら、それは彼の生存を実のところ置いてけぼりにすることだろうし、彼が「ゲイである」というその代え難さを台無しにしてしまう。彼は自らの生存を楽しんでいるし、ゲイであるがゆえの「その人」との出会いを肯定している。そして、彼は闘うことを避け、だれも否定しようとはしていない。

「ゲイであることに感謝こそすれ不満はないよ。」

だからといって、彼の生存は同性愛差別に対して闘っている人たちや運動を否定するものではない。彼は闘うという言葉を嫌うけれども彼の生存を次のように形容できるだろう。

―生存という闘争―

それは静かに、自らを否定する声に対して、ただ「なぜ」と問うのである。

注

（1） 実際、同性愛が直接の理由でクビにされるということはあまり聞かないが、遠回しに、それが原因で職場の同僚と齟齬を生じるという理由でクビに追い込まれる事例はよく耳にする。

（2） 彼女についてここで語ることには問題がある。彼女自身、ゲイとレズビアンの間の差異を強調しているし、現在の彼女をゲイ・リブと位置づけることは難しいことのようだ。ゲイとレズビアンの間の差異についてここでは言及しない以上、彼女を引用しないという誠実さが要求されると思うが、しかし、ゲイを肯定する上でその記述が強力な武器であると思い引用させてもらった。

（3） 同性愛嫌悪は内面の葛藤のようでいて、実のところ他者に対する表現の問題である。社会的に流通している同性愛嫌悪の振る舞いとの関係によってこそ存在する葛藤なのだ。ゲイであることも、ゲイという言葉も、それを語ることも他者へ対する表現であり、他者との交わりの中で身につけた作法である。

参考・引用文献

・伏見憲明：『プライベート・ゲイ・ライフ』学陽書房、1991
・掛札悠子：『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社、1992
・キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也：『ゲイ・スタディーズ』青土社、1997
・伊藤悟＆簗瀬竜太：『異性愛をめぐる対話』飛鳥新社、1999

（その他にも参考にした文献は何冊かある。しかし、そのすべてを載せずに、上に挙げた４冊に限ったのは、もし機会があれば是非目を通してほしいという願いがあるからだ。）